



京都府
京都市

観光地点検

奈良県立大学地域創造学部講師
岡本 健

修学旅行の訪問、生涯の「思い出」 学生の観光案内、受験校選びに影響

観光地に旅行者をいざなう観光情報といえど何が思い浮かぶだろうか。ガイドブック、パンフレット、口コミ、インターネットなど、様々なメディアが考えられる。これらの外部情報も重要だが、我々のもっともアクセスしやすい情報、それは「記憶」だ。より一般的な言葉で言い換えると「思い出」である。

学生時代の思い出には、様々なものがあるだろうが、多くの人がその中に修学旅行を挙げるのではないだろうか。普段は教室で共に学ぶ同級生と、旅行という非日常を過ごす修学旅行。そうした思い出がある場所は、時を経て観光に出かける際の候補地に挙がりやすい。

修学旅行の歴史は古い。明治時代に主に師範学校で実施された「長途遠足」「遠足」「行軍」

と呼ばれていた行事がその起源だ。太平洋戦争によって一時中断されるが、1946年には早くも実施例が現れ、今日まで続いている。財団法人日本修学旅行協会の調査によると、2010年度に国内修学旅行を実施した高等学校の割合は75.9%である。海外修学旅行も加えると93.9%となる。現在でも9割強の高校で実施されていることになる。幅広い世代の人々が体験した旅行行動であると言える。

修学旅行と進学の関係に着目

同調査では、見学先についても明らかにされている(表)。

沖縄県が20位以内に8カ所ランクインしており、国内修学旅行先として沖縄県の人気の高さがうかがえるが、京都府も10位と16位にランクインしている。ちなみに、中学校の修学旅行の旅行先のランキングでは京都府が1位である。京都が修学旅行先としてよく選ばれていることがわかる。

一方、京都は

多数かつ多様な大学が立地する「大学のまち京都」でもある。京都市総合企画

局政策企画室と大学コンソーシアム京都是、これを、活用すべき「知の集積」ととらえ、未来の京都づくりに向けた政策を創造するため、11年度より共同事業『未来の京都創造研究事業』を正式にスタートさせた。12年度は指定課題として「京都地域の大学進学に修学旅行等が与える影響分析と学校行事を活用した魅力発信の方策」が設定され、平安女学院大学の井上学准教授を中心とする研究チームができた。中高生の修学旅行先として選ばれ、かつ、将来の進路の一つとなる大学が多く立地している京都で、修学旅行と大学進学の関係性についての調査、研究を実施し、市の政策に生かすという試みだ。筆者もこの研究チームに加えていただいた。その研究成果を元に、将来を展望してみよう。

3割が大学進学に影響

この取り組みの大きな柱の一つが、京都市(一部その周辺も含む)に位置する大学、短大、大学院の学生・院生に対するアンケート調査だ。結果、857(男性44.0%、女性56.0%)の回答が集まった。そのうち、修学旅行で京都を訪れたことが



おかもと・たけし 専門は観光社会学、コンテンツツーリズム論。1983年奈良県生まれ。北海道大学文学部卒、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程修了。博士(観光学)。主著に『In次創作観光—アニメ聖地巡礼/コンテンツツーリズム/観光社会学の可能性』(北海道冒険芸術出版)がある。

表 高校の修学旅行見学先ランキング

順位	見学箇所	都道府県名
1位	東京ディズニーリゾート	千葉県
2位	首里城	沖縄県
3位	志賀高原スキー場	長野県
4位	ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館	沖縄県
5位	海洋博公園・美ら海水族館	沖縄県
6位	平和祈念公園・平和祈念資料館	沖縄県
7位	国際通り	沖縄県
8位	ユニバーサル・スタジオ・ジャパン	大阪府
9位	奈良公園・東大寺	奈良県
10位	ガマ・壕	沖縄県
10位	清水寺	京都府
12位	伊江島	沖縄県
13位	旭山動物園	北海道
14位	浅草・浅草寺	東京都
15位	富良野	北海道
16位	金閣寺	京都府
17位	長崎平和公園・長崎原爆資料館	長崎県
18位	お台場	東京都
19位	富良野スキー場	北海道
20位	おきなわワールド	沖縄県

あるという回答は361（42.1%）であった。修学旅行で京都に来たことが大学進学に影響を与えているかどうかを尋ねると「大きく関係している」と「やや関係している」という回答の合計が約33%に上ることが明らかになった。筆者にとって、この数値は意外に多いと感じられた。大学は主に「偏差値」や「学びたいこと」「学費」「通学のしやすさ」などの条件で選ばれていると考えていたからだ。

ただし、注意せねばならないのは、これは京都市への訪問と大学進学との関係であることだ。いわば京都イメージの向上が大学進学に影響を与えていると言えよう。では、実際に修学旅行期間中に京都市内の大学を訪れている高校生はどの程度いるのだろうか。高校の修学旅行期間中に大学を訪問したと回答したのは、この設問で集まった388の回答のうち、たった3.4

%である。高校の修学旅行プログラムに大学訪問が入っていたと答えたのはさらにその半数であった。つまり、現状では、修学旅行で京都を訪れることによって京都の大学への進学が促されているようだが、大学それ自体に訪れている場合はまれで、

高校側も修学旅行を大学進学を意識づけの機会と位置付けているケースは少ないと言えそうだ。

今後のポイント

今回の事例は、現場のニーズから調査事業を提案し、大学の研究者を活用して、実証的なデータや考察結果を得た点が評価できる。観光統計は、その不備が指摘されており、近年整備されつつあるが、地域によって必要な情報は異なる。政策に生かすための最適なデータを得る際に、地域に根ざした大学の「知」を活用しない手は無い。

大学も地域との連携・共同のあり方を模索できる。ただしWIN-WINであることは重要なポイントだ。今回の事業では、研究者は研究資金やデータの提供、調査の補助を受けられ、さらに、実務者から現場の最新情報やアドバイスを得ている。こうした大学や研究者への投資な



大学の研究成果を生かした観光振興にも注目が集まる（JR京都駅前）

しに、ただ成果を還元せよと言っても効果は薄い。

今回の調査で抽出された課題を解決するには、京都の大学のことをよく知ってもらう必要がある。たとえば、京都文教大学（京都府宇治市）では、「たび旅」という先進的な取り組みが実施されている。これは、大学生が修学旅行生のフィールドワークをナビゲートするもので、JTB、宇治市観光協会と連携した課外活動だ。同大学は12年度から観光・まちづくりコース（13年から観光・地域デザインコース）を設置しており、この取り組みが地域連携や学生の教育機会としても期待されている。このように大学生と高校生との出会いの場を作ることによって、高校生は京都の大学の具体的なイメージを描くことができ、それが思い出となり、受験する大学の候補として挙がる確率は高まる。特に、ブランド力が弱い中小規模の大学にとって有効な方法になるだろう。

今後は、今回の調査結果を生かした実践を行い、継続的な調査でその効果を測定していくことが重要である。

